

増澤譲太郎さんの逝去を悼む

第9代気象庁長官増澤譲太郎さんは、2000年8月29日享年77歳で亡くなられた。

増澤さんは、東京大学理学部地理学科を卒業し戦争直後の1945年気象庁に入り、海洋業務一筋に精根を傾けられる一方、黒潮調査に取組み海洋学者として優れた業績を残された。後年海洋学会理事長を務められた。

増澤さんのリーダーシップで推進された東経137度線の海洋観測は、1967年に開始され、通貨事情など様々な困難を克服して遂行された。この資料の蓄積が、気候変動問題に関して重要な役割を果たすものとして世界的にも高く評価され、拡充強化されて今日でも継続されている。

海洋畑から一般気象業務への転進は、気象庁海洋課長から札幌管区気象台長に任ぜられた時に始まった。同じ時私は予報課長から仙台管区気象台長に転じたのであるが、同期生でありながらおつき合いが始まったのはこの前後であり、彼の暖かみのある人間性に惹かれるようになった。増澤さんとしては始めて取組む気象業務であったろうが、抜群のバランス感覚で立派にこなしておられることに感服したものである。彼の気配りの深さ、面倒見の良さは職員を惹きつけずにはいなかったであろうと思われる。

以後気象庁部長を歴任して長官へと昇任され、1980年から3年を勤め上げられた。人の和を大事にし、細心の気配りは先輩・同僚・部下の一人一人に及び、長官として人望を集められた。また人事面にも細かな配慮を加えられ、恩義を感じている職員も多い。

以下私自身忘れることのできない思い出を紹介したい。管区台長時代の厄介な仕事に定員削減問題があっ



た。当時通報所という小さな官署の廃止が重要課題とされていた。私の勤務する仙台の管内にはその通報所数が多いこともあり、課せられた削減数の負担は職員総数の少ない管区としては過重であることを打合せ会議の席上で訴えたことがある。その時増澤さんは、自分の所で引き受けましょうと私の立場をかばう発言をされ、頭の下がる思いをした次第である。

増澤さんは21世紀を見ずして逝かれた。日頃自分は長生きできないのだと漏らされることがあり、そんなことはなかろうと元気付けたことが一再ならずあった。細かな気配りが、ご自分の神経に過重の負担をもたらしたのではと思われてならないのだが、何にしても惜しい人を亡くしたものと残念である。心からご冥福をお祈りしたい。

松本誠一